



侍たちが群雄割拠し  
また一つ城が墜ちた。  
貧しい百姓が罷から  
鶴を助けたのは  
そんな雪の日のこと…。

どんどん。  
どん

「この雪で難儀しています。  
この 雪 難儀

一晩泊めて  
ひとばんと

いただけませんか？」

戸板の向こうにいたのは  
といた む

一人の娘。  
ひとり むすめ

「あつ」





百姓が驚いたのも無理はない  
ひやくしょうおど

いくささいちゅう

戦の最中に死んだ女房に  
むり  
にようぼう

そつくりだつた。

「雪はまだ降り続く  
ゆきふづ

じゃろう

何日でも泊まつていくが  
なんにちとま

いい…」





ところが  
米も麦も  
そこ  
底をついてしまつた。  
「そうだつた  
これまで冬の間は  
女房が機を織つて  
食い繋いでおつた…」





それは貧しい百姓の目にも  
こうか まず ひやくしよつめ  
高価とわかるものたつた。  
まるで鶴の羽根のように  
しる はね  
白く輝き  
しろ かがや  
ふ  
触れてみると  
ふ  
鶴の胸毛のように柔らかく  
つる むなげ  
やわ  
あたたかかった。

この反物には庄屋も驚いた。

たんもの  
しようや  
おど

「これ程の代物はわしも  
ほど  
しるもの

み  
こと

見た事がない。

あたら  
しる  
はい  
との

新しく城に入られた殿に

けんじょう  
けんじょう

献上しよう」







百姓は気になつて  
いつたい中で  
何をしているのか。

機を織る音さえもしない。  
しんと静まつたまま



娘がちょうど首に刃を

突き立てていたので

百姓は慌てて小太刀を取り上げた。

「私は先の領主の姫にて

今は追われる身。

あの反物がお城に献上されたとあれば

ここも捕方に囮まれましようや。

お前様に危害が及ばぬよう

文を書きました故

私の亡骸と共に

差し出しちゃいまし」



その間を血で穢すなど許さん！。

さあ、  
で  
出て行け！」

百姓は文を破り捨て

娘を雪の上に突き飛ばした。

「さあ行くのじゃ、捕方が来る前に

国境を越えよー！」

「ああ私は

お前様をお慕いしております…」







「この反物

ます

ひゃくじょう

す

しうもの

貧しき百姓には過ぎた代物。

先の領主が姫の物に相違あるま

ひめ りょうしゅ ひめ もの  
いどころ しょうじき もう

姫の居所を正直に申せば

ほうただ

しゃめん

その方直ちに赦免し

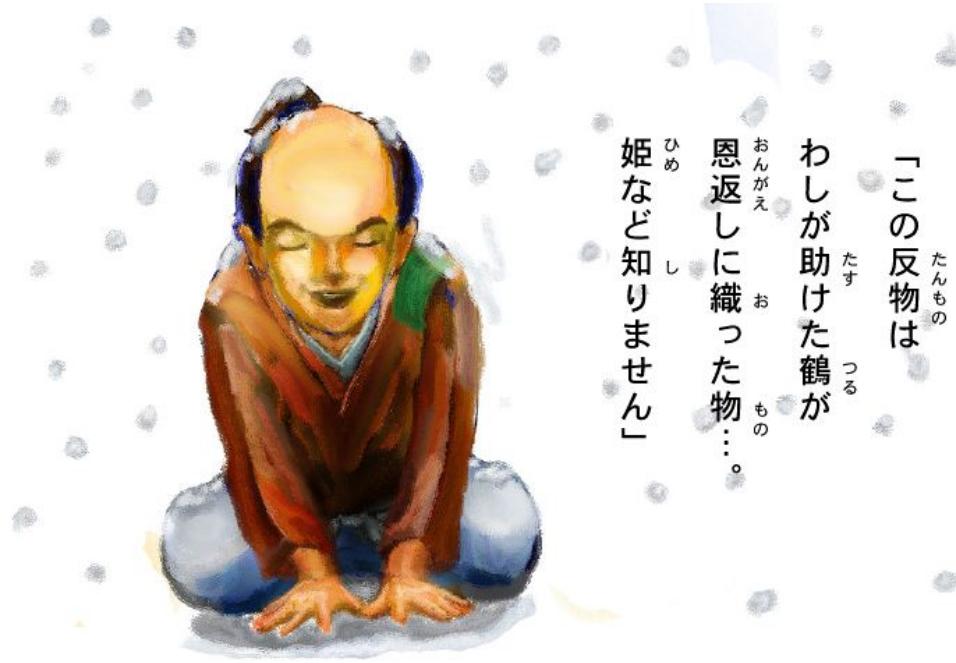
ほうび つか

褒美を遣わそうぞ」

とのさま

たんもの

「殿様、この反物は：」



「この反物は  
わしが助けた鶴が  
恩返しに織つた物…。  
姫など知りません」